

学部1年生を対象とした映像作品視聴を通じたウェルビーイング理解の試み

小田, 友理恵 / Oda, Yurie

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

現代福祉研究 / THE BULLETIN OF THE FACULTY OF SOCIAL POLICY AND
ADMINISTRATION : Reviewing Research and Practice for Human and Social
Well-being : GENDAIKUFUKUSHI KENKYU

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

131

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

2023-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030555>

<研究ノート>

学部1年生を対象とした映像作品視聴を通した ウェルビーイング理解の試み

小 田 友理恵¹⁾

【抄録】 「健康で幸福な暮らし」を意味する「ウェルビーイング (Well-being)」は、筆者が所属する現代福祉学部の教育理念のキーワードである。学部1年生を対象に開講されている基礎演習の授業で映像作品 (2020年公開の映画「すばらしき世界」) 視聴を通したウェルビーイング理解を試みることとした。本研究は、その実践を報告し、学習効果の検討に資することを目的としている。受講生が作品中にウェルビーイングの観点から見出した課題を挙げてもらった。見出された課題は社会福祉・地域づくり・臨床心理にまたがり多岐にわたった。それらを教員がKJ法を援用して分析し、バフチンの対話理論を紹介しながらフィードバックを行った。その後受講生同士でグループディスカッションを行った。その結果、多角的な観点からウェルビーイングを考え、対話の重要性を学ぶ機会を提供できたと考えられる。

【キーワード】 大学教育 授業実践 ウェルビーイング KJ法 対話理論

問題と目的

学部理念であるウェルビーイング理解

「健康で幸福な暮らし」を意味する「ウェルビーイング (Well-being)」は、筆者が所属する現代福祉学部の教育理念のキーワードである。

本学部では1年次で基礎演習という通年授業を開講している。1クラスおよそ20名で構成され、入学した学生全員がいずれかのクラスに振り分けられ、教員によって学業や学生生活に関するフォローが行われる。この基礎演習では、基本的なアカデミックスキルの習得や仲間づくりの他に、ウェルビーイングの理解も重要な課題となっている。なお、ウェルビーイングの理解は、本学部の特徴である社会福祉・地域づくり・臨床心理の大きく3つの分野からの理解を念頭に置いている。具体的には、前期では白杖や車いすを体験する授業や、事例を通した生活課題に関するディスカッションなどを通して、ウェルビーイング理解を深めている。後期では例年、学習の総仕上げとして、「社

¹⁾ 法政大学現代福祉学部臨床心理学科

会の課題を解決し学部理念である Well-being を実現するための方策と、それを高める人材・進める人材になっていくための提案」をテーマにグループ活動を行い、全クラス合同でコンペティションを行っている。

筆者は2021年度から基礎演習のクラスを担当することとなり、ウェルビーイング理解のための効果的な教授法の検討を行ってきた。今回、映像作品視聴を通したウェルビーイング理解を試みたので、その実践報告を行う。

映像作品（映画）の視聴で見込まれる効果

第一に、視覚・聴覚的な情報とナラティブによる訴求力、およびそれぞれの相乗効果によって、学生にウェルビーイングとは何かをより身近に考える機会を提供することができる。学部1年生は2年次から履修する専門演習を通した学術的な文献の読み方などにまだ通じていない。専門的な文献を読みこなすための方法を習得する前に、入門的な導入によって学習意欲を高める必要がある。しかし、近年は若者の間でのIT普及やSNSの流行などによって活字離れがさらに進み、文献等の文字情報を通して学習意欲を高めることのハードルが、以前よりも上がっていることが推測される。また、社会問題に対する理解を深める際に、概略を把握するために統計的データを呈示することは不可欠だが、同時に視覚や聴覚、情緒に訴えつつ、一つの事例をナラティブとして呈示することによる訴求力は大きいと考えられる。

第二は、メッセージ性とエンターテインメント性を兼ね備えているという映画の特徴による学習効果である。今回選択した映像作品は映画であった。映画は、教育目的で作成された視聴覚教材と異なり、必ずしも直接的に教育効果を狙うものではない。しかし、特に社会問題を扱う映画に関してはメッセージ性や意図をもって制作される場合が一般的で、本作品もその一例であると言える。映画は生の事例と比較して、監督や俳優の解釈をもとにした演出や演技を介しているため、そのエッセンスが理解しやすい形で呈示されているという利点がある。しかし、強いメッセージ性が含まれるからこそ、適切な作品を選ぶことが求められる。なお、作品の選択については後述する。また、多くの映画は興行成績を伸ばすためにエンターテインメント性も共存させているため、必ずしも学習動機や志が高くない学生にとっても、楽しく飽きずに視聴することができるというメリットがある。

補足的な事柄ではあるが、次に挙げる2点は基礎演習という授業内容に適合する利点と考えられた。一点目は、同じ空間と時間で一つの作品を共有できるという体験をすることができ、かつ、その感想を仲間とともに話し合えることである。後期の授業で長期間取り組むグループワークに向けてクラスの一体感を高め、基礎演習の目的の一つでもある仲間づくりに資する点がある。二点目に、

DVDを利用した視聴であるため、柔軟な対応が可能となる。(特にコロナ禍においては)やむを得ず欠席せざるを得ない学生にも、後ほどDVDを渡して観てもらい、各学生の都合に合わせて補習が可能である。

作品の選択とその根拠

本研究の教授法のために選択した作品は、2020年に公開された西川美和監督の日本映画「すばらしき世界」である。人生の大半を刑務所で過ごした三上正夫(役所広司)が、身元引受人や生活保護担当の市役所職員、近隣の住人たちに支えられて社会復帰を目指すというストーリーである。本作品には、社会福祉・地域づくり・臨床心理の3分野にまたがる多様な視点からの問題提起が盛り込まれている。具体的には、社会福祉的な観点としては生活保護の申請や犯罪歴のある者への偏見や職探しの困難、地域づくりの観点としては近隣住人とのトラブルやふれあい、臨床心理の観点としては養育者との愛着形成の影響などが挙げられる。

本作品の特色は、何よりもノンフィクションならではの迫力や説得力である。本作品の原作は1990年に講談社から出版され、1991年に第2回伊藤整文学賞を受賞した、佐木隆三によるノンフィクション小説『身分帳』である(佐木,1990)。もちろん演出上の脚色や時代背景や舞台の変更などは施されているが、まったくの架空の事例や作り話などではなく、大筋としては現実にあったことだと学生が認識することで、興味や関心を向上させる効果がある。

作品としての魅力や完成度に関しては、2020年9月に第45回トロント国際映画祭に出品、2020年10月に第56回シカゴ国際映画祭で観客賞と最優秀演技賞(役所広司)の2冠受賞、2021年4月に第47回シアトル国際映画祭で観客賞受賞など、国際的にも高い評価を受けており、申し分がないと考えられた。

なお、本作品は映画倫理委員会による区分表示はGであり、年齢にかかわらず誰でも閲覧可能である。「小学生以下の年少者が観覧しても動揺やショックを受けることがないように慎重に抑制されている。簡潔な性・暴力・麻薬や犯罪などの描写が多少含まれるが、ストーリー展開上で必要な描写に限られ、全体的には穏やかな作品である(一般財団法人映画倫理委員会,2009)。」ただし、本作品にはストーリー展開上で必要な簡潔な性・暴力・麻薬や犯罪などの描写は含まれているため、履修者の中には心理的に動揺する者がいる可能性がある。そのため、視聴中に気分が悪くなったり、観たくないと感じた場合は遠慮なく教員まで申し出ること、その際には別の課題などを課すので、視聴を拒否したことによって成績が下がる心配は一切ないことを、あらかじめ説明しておく。また、学びのペースを自己コントロールし、必要な援助要請を出しながら学ぶことの重要性も合わせて強調した。

本研究の目的

本研究は、学部一年生を対象に映像作品視聴を通じたウェルビーイング理解を試み、その実践を報告し、学習効果の検討に資することを目的としている。

方法

研究協力者

基礎演習の受講者20名に協力を依頼し、承諾を得られた協力者の感想を分析した。

実施予定時期

映像作品の視聴は2022年9月28日(水)2限と10月5日(水)2限で実施した。また、分析とフィードバックは11月30日(水)2限に行った。

実施場所

映像作品の視聴は、現代福祉学部棟のゼミ室内で、100分授業2回分を用いて行われた。2回目に欠席者が1名いたため、自宅や図書館などでのDVD視聴で学習を補った。アンケート用紙は学習支援システム上で提出を求めた。

アンケート用紙の収集

次の2点の内容を盛り込んでアンケート用紙を作成し、提出するように求めた。「①ウェルビーイングの観点から着目したエピソード、および、福祉的・地域的・心理的・その他社会的課題との関連(できるだけ多く挙げてみてください)。②そのほか感想など。」合わせて、正解はなく、回答の内容が成績に影響することがないことを明示した。

分析方法

提出されたアンケート用紙内で①および②に関する記載を、一項目ずつ切片化して抽象化し、紙片カードにした。集まったカードはKJ法(川喜多, 2017)を援用して分類・配置した。本来はボトムアップに分類と配置を行うKJ法とは異なるが、学習の目的に沿って福祉的・地域的・心理的・その他の場合を、それぞれ空間上にまとめて配置した。学生間で重複する内容については一つのラベルに統合し、同じ事柄を記載していた人数を数えて記載した。これらの分析はすべて個人情報が含まれない状態で行った。

フィードバック

分析結果はA4一枚に視認性を高めた形でまとめ、授業内で配布し、解説を行った。その狙いとしては、多角的な視点を学生間で共有し、着眼点の多様性を学生自身が実感できることが挙げられる。異なる視点を持つ者同士の対話の重要性を、バフチンの対話理論(田島, 2021)に言及しながら強調した。

また、研究には大きく分けて量的研究と質的研究の2種類があり、後者の例としてKJ法があることを説明した。KJ法を援用した分析の具体例として今回の分析結果を提示した。ただし、今回の分類と配置の方法が、本来のKJ法とは異なることも補足的に説明した。

教授法の評価方法

フィードバックの後に、簡単なグループディスカッションを行うように指示した。その授業のアンケートの内容をもって、教授法の効果を検討するための材料とした。

倫理的配慮

学習支援システム上で研究協力の依頼を行い、承諾を得られた人の感想のみを分析対象とした。アンケート実施時に、研究協力の承諾は強制ではなく任意であり、アンケートの内容および承諾の有無や承諾の撤回が授業の評価に影響することは一切ないことを明示した。

研究協力依頼のタイミングとしては、アンケートの内容に影響を及ぼさないよう、フィードバックを行い、アンケート用紙の提出が終わった後に12月7日(水)の授業内で行った。本研究は、法政大学人間社会研究科研究倫理委員会から審査免除の承認を受けて実施された(第220105_2号)。

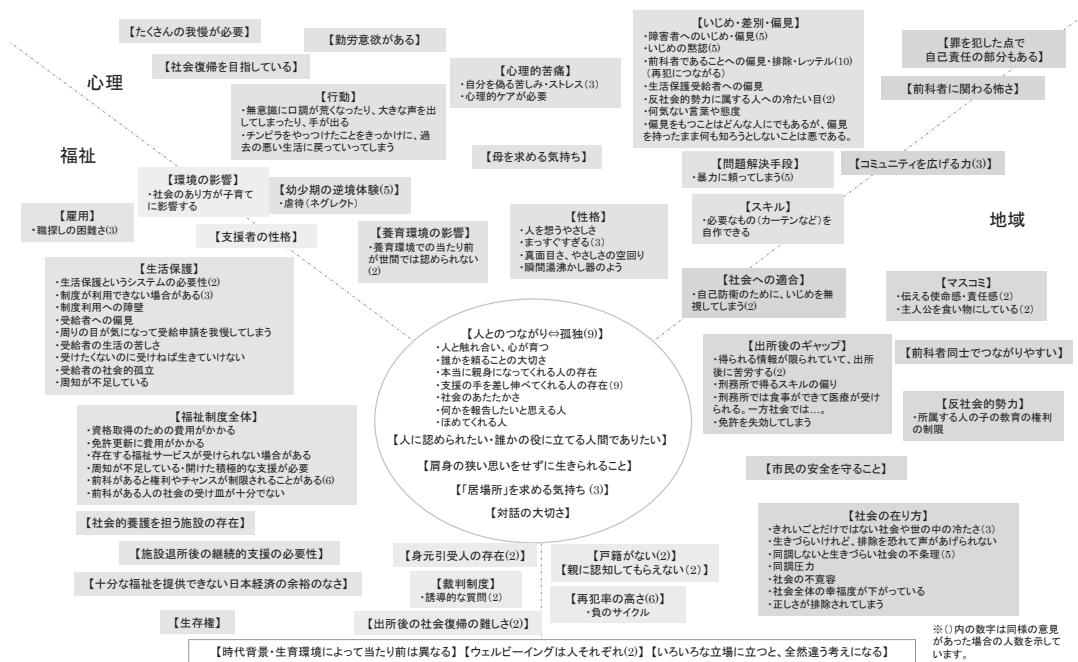
結果

映像作品視聴後のアンケートの分析結果

分析の結果、図1が得られた。受講者が挙げた観点を抽象化してリスト化し、暫定的に福祉的・地域的・心理的・その他の観点到分けて配置した。以下では主なカテゴリーの説明を行う。なお、【】内は筆者が暫定的に命名したカテゴリー名である。

福祉的観点としては、【生活保護】について多くの記述があった。生活保護というシステムの必要性をはじめ、制度利用への障壁や、周りの目が気になって受給申請を我慢してしまうこと、受給者の生活の苦しさや、受けたくないのに受けねば生きていけないというジレンマ、社会的孤立などが挙げられた。【福祉制度全体】としては、存在する福祉サービスが受けられない場合があること、周知

図1 映画『すばらしき世界』を視聴して、ウェルビーイングの観点から見いだされた課題



が不足していることなどが挙げられていた。【社会的養護を担う施設の存在】の必要性や【生存権】が認識されていた。一方で、【施設退所後の継続的支援の必要性】が訴えられ、【十分な福祉を提供できない日本経済の余裕のなさ】が指摘されていた。また、【雇用】の面では職探しの困難さが挙げられていた。

地域的観点として、【社会のあり方】について多くの記述があった。特に、社会の不寛容さや、同調圧力の強さから生きづらさを感じていても排除を恐れて声があげられない点が挙げられていた。社会全体の幸福度が下がっていることへの指摘もあった。また、刑務所【出所後のギャップ】についての記述があった。刑務所内で得られる情報やスキルの偏りや、刑務所では食事ができて医療が受けられるが社会ではそれが厳しいこと、そして【前科者同士でつながりやすい】ことも挙げられていた。【マスコミ】の伝えることへの使命感・責任感に感動する一方で、結局は主人公を食い物にしていることへの落胆もあった。【反社会的勢力】に属する人の子どもの教育の権利が制限されてしまう一方で、【市民の安全を守ること】も重要であるという指摘があった。

心理的観点として、主人公の【性格】や【行動】についての記述があった。まっすぐすぎる性格ゆえに、人を想う優しさが空回ってしまうこと、無意識に口調が荒くなったり大きな声を出してしまったり手が出てしまうこと、チンピラをやっつけたことをきっかけに過去の生活に戻って行って

しまうことなどが挙げられた。主人公が【問題解決手段】として暴力に頼ってしまうことへの指摘もあった。その背景として、ネグレクトなどの【幼少期の逆境体験】や【養育環境の影響】が挙げられていた。主人公に【勤労意欲がある】ことや【社会復帰を目指している】こと、カーテンなどの必要なものを自作できる【スキル】や【コミュニティを広げる力】などの主人公が持っている強みが着目された。また、【母を求める気持ち】があることや、生活する上で【たくさんの我慢が必要】であることも気づかれた。こうした【心理的苦痛】、特に自分を偽る苦しみやストレスなどへの心理的ケアの必要性も挙げられていた。映画内で描写されていた【いじめ・差別・偏見】についても多くの記述があり、その対象は障害者、前科者、生活保護受給者、反社会的勢力に属する者などであった。前科者の社会的排除が再犯につながるという指摘もあった。「偏見を持つこと自体はどんなひとにでもある」が「偏見を持ったまま何も知らずとしないこと」に対しての鋭い批判もあった。

そのほか、福祉と地域の境界上の観点としては、【身元引受人の存在】の重要性、【戸籍がない】ことや【親に認知してもらえない】ことによる困難、【出所後の社会復帰の難しさ】などの負のサイクルによる【再犯率の高さ】、【裁判制度】における誘導的な質問の影響が挙げられた。心理と福祉の境界上の観点では、子育てへの、社会のあり方などの【環境の影響】が挙げられた。また、【支援者の性格】によって支援が左右される点も指摘された。地域と心理の境界上の観点としては【罪を犯した点で自己責任の部分もある】【前科者に関わる怖さ】などの率直な意見もあった。これらは、受講生の内省を深めるきっかけとなる重要な観点である。【社会への適合】のために、いじめを無視せざるを得なかったことについても挙げられた。

心理・福祉・地域すべてにまたがる観点として、【人とのつながり（およびそれが得られなかった場合の孤独）】について多くの記述があった。【人に認められたい・誰かの役に立てる人間でありたい】【肩身の狭い思いをせずに生きられること】【「居場所」を求める気持ち】などの、私たちの誰もが当てはまると思われる重要な観点が見出されていた。また、偏見や差別を乗り越えるための【対話の大切さ】も挙げられていた。

上記の分類にはうまく当てはまらなかったが、ウェルビーイングに関する重要な気づきとして【時代背景・生育環境によって当たり前は異なる】こと、【ウェルビーイングは人それぞれ】ということ、【いろいろな立場に立つと、全然違う考えになる】ことなども挙げられていた。これらは、筆者がフィードバックの際に強調した対話の重要性に深く関連する気づきであった。

フィードバック後のアンケート

上記の分析結果について、図1を配布し、授業内でフィードバックを行った。その際には、田島(2021)を教材として配布し、パフチンの対話理論の概要を説明した。図1を実例としながら、各

人の視点の唯一性を反映するバフチンの「視覚の余剰」の概念を紹介した。本作品の主人公のモデルである田村明義氏は厳しい人生を懸命に生き抜き、奇跡的な巡り合わせの末に小説化と映像化が果たされた。その結果、バフチンが「異化」を促すために導入した概念装置である「悪漢・道化・愚者」の役割を、本作品がこの授業において果たすことになったのではないかと、という筆者の解釈を申し添えた。田島(2021)によると、異化とは「話者の独自の視点からことばや世界観の意味を意識的に捉えなおすという、他者との対話における現象を示す概念」であり、「悪漢・道化・愚者」とは、「社会の周辺部に住む他者であり、慣習化された世界観に対して無理解を示したり、自動的に承認された権威を批判してその虚像を暴いたりすることで、社会のあり方について人々に自立的な考察を迫るトリックスター」である。

フィードバックの後にグループディスカッションを行った。余裕をもって行いたかったが、授業の他のスケジュールとの兼ね合いで5分間という短い時間でのディスカッションとなった。フィードバックおよびディスカッションの感想についてのアンケートを記入、提出してもらった。19名の授業出席者のうち、16名からアンケートの提出があった。そのうち半数以上の11名アンケートで、クラスメイトの意見を通して新たな視点が獲得されたことが何らかの形で表現されていた。

以下は、一部の感想を抜粋したものである。「同じものと同じ時間に見たのに、みんなの考え方がこんなに細かく分類されているのを見て驚きました」「クラス全体のリアクションペーパーをまとめてみただけでこんなに意見が出て話を深められることに驚きました。自分では思いつかなかった見方や共感する意見があり、共有できてよかったです。」「フィードバックは自分が思った以外のことも多くあり、視野が広がったように思いました。」「自分の意見と周りの人の意見を交換するという機会はいろんな発見がありとても良いと思いました。また、もう一度みんなが考えていたことを知った状態でこの映画を見てみたいと思いました。」「同じ映画を見たけれども、ひとりひとり感じたことだったり、物事を見る視点が違うんだと思いました。様々な視点から物事を見ることで物事のある一面にとらわれることなく色々な面から考えることができ、新しい発見に繋がりそうだなと思います。」「フィードバックを見て、一つの映画でも本当に多くの観点があるのだなと気づき、とても面白かったです。友達と何を書いたか、自分たちの書いたことがどこに区分しているのかを話し合えたことで、理解がより深まったように思います。その際、多くが自分になかった視点であったので、大変興味深かったです。こんな見方もあるんだ、こんな楽しみ方もあったのだとはっとさせられました。」「かなり忘れていたことも多かったけれど自分と同じような考えの人は一定数いてやはりそうだなと思った。また、それ以外の人の考えを聞くことがとても楽しかった。」「私の考えにはなかったような事柄や様々な観点から見たものの考えが書いてあり、納得したり共感したりする部分が沢山あった。…(中略)…社会での生きづらさが浮き出てくるように感じられたし、ウェルビーイング

グの実現はまだ遠い未来なのかなと思った。また、まとめられた意見を地域・福祉・心理別で見ることで『すばらしき世界』の主人公の境遇の大変さを改めて実感できた。」「今回の授業を受けて、クラスメイトの意見を知ることができ、すばらしき世界というタイトル名について、なぜこのタイトルになったのか知ることができた。」

同じ時間に同じ映画を見たにもかかわらず自分と異なる視点をクラスメイトが持っていたことに対して、新鮮な驚きが表示されていた。物事に対して自分自身の持つ視点を相対化する必要があることに気づいた受講生もいた。フィードバックの時間には、クラスメイトとお互いに意見を交わし合うことを楽しんだことが窺える感想もあった。また、自分と同じ考えを持つ人がいたことに納得する声もあった。映画の描写や意図、メッセージ性に関する理解をさらに深めた様子も窺えた。

考察

映画視聴を行い、受講生が作品中にウェルビーイングの観点から見出した課題を挙げてもらった。見出された課題は、社会福祉・地域づくり・臨床心理にまたがり多岐にわたった。それらを教員が分析してまとめ、フィードバックを行った。その結果、受講生同士の観点を共有しあい、多角的な観点からウェルビーイングを考え、対話の重要性を学ぶ機会を提供できたと考えられる。

限界

フィードバックに関するアンケートは、成績を評価する教員と評価される学生という関係性の影響を受け、教員にとってより望ましく書かれている可能性がある。しかし、抜粋で原文を示したとおり、学生自身の言葉で多様な視点を知ることによる驚きや楽しさなど感情を伴った記述もあり、一定の学習効果が認められたのではないかと考えられる。

今回は映画「すばらしき世界」を題材として選択し、一部の受講生では学習の狙いが達成できたことが認められた。しかし、扱うタイミングや文脈、学習の狙いによって、視聴する映像作品の適切さは変わってくるのが予想される。その都度検討する必要があると考えられる。

分析は授業全体の構成上、学生が行う時間的な余裕がなかったため教員が行った。時間が許せば、学生同士で意見を交換しながら分析が行うほうが学習効果は高いと思われる。しかし、現状の授業の枠組みでは時間的に、また学部1年生を対象としていることもあり技術的にも難しさが想定される。今後の課題としたい。

引用文献

一般財団法人映画倫理委員会 (2009). 映画4区分の概要 一般財団法人映画倫理委員会 Retrieved from <https://www.eirin.jp/img/4ratings.pdf> (2022年7月7日)

川喜多 二郎 (2017). 発想法 改版 創造性開発のために 中公新書

佐木 隆三 (2020). 身分帳 講談社文庫

田島 充士 (2021). バフチン先生は何を学生たちに教えたのか——対話理論と教育実践 水声社 コ
メットブッククラブ コメット通信 14 ('21年9月号) pp.13-15